

健全な男女共同参画社会をめざす会

正しい男女平等とは

[トップ](#) [入会のご案内](#) [会報](#) [活動内容](#) [リンク集](#) [お問い合わせ](#)

[会報一覧に戻る](#)

なでしこ通信 11号

なでしこ通信 目次

第11号 ○子育てが危ない！
北海道豊岡中央病院院長 田下昌明

○ふたつの家族論を考える

○第4回講演会「まっとうな日本人の育て方」

のご案内

事務局



健全な男女共同参画社会をめざす会 H18・6・1

なでしこ通信 第11号

*** 子育てが危ない！ ***

北海道豊岡中央病院院長 田下 昌明

「父親も母親も同じ育児」は大間違い

今言われている（父親も育児をすべき）のは、男も女も同じことを半分ずつしろという話で、これは育児の大原則からはずれてしまって、何もいいことはありません。ボウルビィ（英国の医師・母子関係の理論の大家）が言っている「一人の女性による継続的養育」というのはもうほとんど確率された理論です。ここでいう一人の女性というのは何も産みの親でなくてもいいし、年齢も問わない。けれども女性でなければならないとボウルビィは言っています。つまり育児は男女が役割を半分ずつというわけには絶対にいかないのです。



また、フェミニズム考え方は、母と父との役割の違いを認めないわけで、ここに基本的な間違いがあるのです。人間を含めてあらゆる動物は、母子の一体感、母親による強力な保護というものがあって初めて、その動物としての成体になっていける。しかし、母親の保護がないと、その個体は、人間なら生き延びられますけど、他の動物ではまず生き延びられない。やはり、父と母に役割があるということは、有性生殖をする生物の原則なのであって、この点を否定するフェミニズムの考え方は間違っています。

生命というものには「個体の生命」と「種族の生命」という二面性があります。私で言えば、私という個体であると同時に人類なのです。また「種は個に優先する」という鉄則があります。これは種を保存するためには個を犠牲にするということで、どの生物のDNAにもプログラムされています。人類もほ乳

類の一種ですから、この鉄則から逃れることはできません。いま、男女共同参画社会ということを盛んに言っていますがこれが徹底されると、男か女かわからない人間ばかりになり、すなわち性同一障害の人が増え、その行き着くところは日本民族の滅亡です。

父親の役割は何か



心理的発達から言っても、子どもが父親と直接話ができるようになるのは12歳を過ぎてからのことです。母と子の世界はバリアが非常に強くて、それぐらにならないと破れないのです。では父親の役割は何かというと、「母親の後ろ盾」になることです。舞台に例えれば、父親は床です。どんなに飛んでも跳ねても滑ったり転んだりしない母子がともに安心できる環境を作る。これが

父親の重要な仕事です。

また、家庭を一つの「群れ」だとすれば、父親はそのリーダーでなければいけない。父親がリーダーとしての役割を確実に果たしていれば、家庭は情緒的にも経済的にも健康面からも安定する。そうなれば母子関係というものも安定する。

母性愛はDNAにプログラムされた生物学的なものですが、父性愛はDNAにかかれていません。父性愛は社会的産物です。その意味では、子どもから見れば、お母さんがお父さんを尊敬しているから、子どももお父さんを尊敬するのです。ですからお母さんがお父さんをバカにしたりするということは、父子関係をダメにしてしまうわけで、やはり良くないのです。

(間違いだらけのフェミニズム子育て論より)



■ 20代後半に結婚し、30代前半に子どもをつくるという人生設計を立てていました。しかしバブル経済崩壊後、会社は倒産。その後の景気低迷の余波を受け、今の収入は「勝ち組」と呼ばれている階層にはほど遠く、サラリーマンの平均収入にも満たない低水準です。

現状の子育てを考えると、習い事、学習塾、受験とかなりの教育費がかかります。私自身そこそこの教育を受けてきたという自負もあり、子どもの才能を開花させるには教育への投資は必要だと考えます。でも今の、これからの私の収入では、とても夫婦のゆとりと子育てを両立させることはできないと思います。「子どもがいれば生活が苦しくても楽しいものだ」と誰からも言われました。

しかし子どもが幼いうちはともかく、高校、大学ともなれば、“元気が取り柄”とも言ってはいられなくなるでしょう。夫婦でゆとりある生活を送る

か、子どもをつくっていっぱいいっぱいの生活をしていくか。考えた末、
私たちは夫婦二人のゆとりを選択しました。「読売ライフ06年3月号」
より 神戸市41歳男性の投稿

■2月27日付の談話室で「二人目の子どもほしいけれど」を読みました。

「今の経済力を考えるととても悩んでいる」という内容でした。私は2歳の息子と十ヶ月の娘を持つ母親ですが、お子さんを産んでいただきたいと心から思いました。

私は19歳で妊娠、結婚しました。当時23歳だった夫に十分な経済力はなく、その上多額の借金もあったため、生活はとても苦しいものでした。そして息子が一歳にならないうちに二人目を妊娠しましたが、迷うことなく出産できたのは、一生懸命働いてくれる夫の協力と、「裕福でなくても子どもがいれば心豊かに暮らせる」ということを息子が教えてくれたからです。

それと年三回振り込まれる「児童手当」。この支援がどんなにありがたいことか。今では受給額も二人分で本当に助かっています。お金はないより

あったほうがいいとは思いますが、子どもはお金に代えられない宝です。
ぜひ自分たちの宝、国の宝を一人でも多く産んでいただきたいと切に願っています。

「産経新聞」3月8日より 大阪市22歳女性の投稿

さて、みなさんはこの二つの投稿を読まれてどのように思ったでしょう。まず次のような点で対比することができます。

① 経済的視点

両方のご家庭とも経済的には決してゆとりがあるとは思えず、むしろ世間との比較で言えば「正直苦しい」家計を抱えておいでのようです。不況や若年のため十分な収入がないという点は同じです。しかし片や将来の教育費を考え「ノーキッズ」を選び、片や迷わず二人目の出産を選ばれています。後者の方からは「手当の支給」が大きな助けになったこともわかります。

② 子どもへの価値観

子どもについて、前者は「子どもをつくる」という表現をしています。またそれは「夫婦二人でゆとりある生活」と両立させるべきものとしてとらえています。一方後者は「子どもはお金に代えられない宝」ととらえています。

③ 人生の価値

前者は子どもを持つことによって到来するであろう「いっぱいいっぱいの生活」を避けようとしており、後者は「心豊かに暮らせる」中心として子どもを

とらえているようです。



国内問題に限るならば、わが国の将来にとって最大の課題が少子高齢化であることに異議を唱える人は少ないでしょう。若年層が子どもを産もうとしない（あるいは産んでも一人にとどめようとする）理由の一位が、「養育・教育にかかる経済的負担」にあることはよく知られています。そういう意味では前者の方の意見は時代を代表するもの、と言えるでしょう。しかし次のような点から、もう一度考えてみることはできないでしょうか。

○「子ども」って「つくる」ものなのではないでしょうか

「子宝に恵まれる」という言葉があるように、人ひとりの生命がこの世に誕生するということは、決して人の行為だけではなく、人知を超えたはからいや運命に支えられたものです。親の希望や価値観が大切なことはもちろんですが、それだけで産む・産まないを判断していいものなのではないでしょうか

○収入の多い・少ないによって決めるものなのではないでしょうか

子育てにとって確かに理想的な環境というものがあります。収入も多いにこしたことはありません。しかしベストの環境でなければ子どもは育てられないものなのではないでしょうか。歴史をながめても私たちの周囲を見渡しても、すぐれた人材はむしろ苦境にあたりいろいろなハンデを背負った中から輩出しているように思います。せめて人並みの教育を、という親心も理解できますが、人の一生の幸不幸を決めるものはあくまでその子自身ではないでしょうか。

○大人としての成長できるのでしょうか

子育ては多くの困難や心労、場合によっては窮迫を伴うこともあります。しかし人はその過程で苦労に数倍する喜びや幸福を経験し、自己の心を耕し、親と

して成長・成熟してきました。子を持ってこそ味わえる感情や生き甲斐とは、果たして「夫婦のゆとりある生活」と等価交換できるものなのでしょうか。むしろ子どものいないことそれ自身が夫婦のきずなを弱めてしまう心配も否定できません。

■□□事務局からのお知らせ■□□

■めざす会第4回講演会を来る9月24日（日）午後 愛媛県女性総合センターにて開催いたします。講師は医学博士・田下昌明先生です。学級崩壊、キレる子ども、青少年犯罪が話題になるたびに、子育てや家庭での躰の問題が指摘されています。しかし、躰とは何なのか、子育てはなぜ大事なのかという肝心な点はほとんど論じられていません。そこで、長年、小児科医として活躍され、「母子の一体感」こそ子育ての原点だという育児論を提唱されている田下先生に、親子関係の現状や小児科医から見た子育てのあり方、さらには健全な子育てを阻む現在の風潮についてお話いただきます。演題は「真っ当な日本人の育て方」です。「自分の子育ては終わった」思っている世代にも子育ては我が子が自分の子を立派に育てることを見届けて初めて完了、ということをご理解いただける講演会になることと思います。



■5月28日（日）の午後南海放送「たかじんの・・・」をご覧になったでしょうか。男女共同参画推進派の遥ようこ・田島陽子両氏が参加者に「自分達が説くような生き方もいいなあ」と思う人は手を挙げて、と言いましたが、誰も手を挙げませんでした。日本人のほとんどは男女共同参画が推進する女性の生き方に否定的であるにも関わらず、男女共同参画社会基本法に基づいて膨大な国家予算が投入され行政が旗振りしているのが現状です。

■サピオ5月10日号「暴走するジェンダーフリー」の一部コピーを同封致しました。「男女の呼称を“さん”に統一」「男女同室着替えに」から「ひな祭り」「鯉のぼり」などの伝統文化を否定するものまで。「男女の社会的性差からの自由」を掲げたこの思想が「男女共同参画」と相まって日本国中を侵食し始めている。政府も「男女共同参画社会基本法には暴走を生み出すDNAが埋め込まれている」と気がつき始めた。「男女平等」という美名のもと、着実に進行している「暴走のDNA」その実体とは？

■平成17年度の会計報告書を同封致しました。皆様の会費でめざす会の活動が支えられております。心より感謝申し上げます。

■**学習会**は月2回開催しています。会場日時については事務局にお問い合わせ下さい。

■PTAや企業の研修などに講師を派遣しております。

■会員になられて1年になる方には「**なでしこ通信**」にお手紙と振替用紙を同封して更新をお願いしております。年会費はおひとり1,000円です。

健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 小笠原ミワ子

〒790-0931松山市西石井1-3-30

電話090-3181-4004 FAX 089-964-3903

メール t64r59@bma.biglobe.ne.jp

Copyright © 2009, 健全な男女共同参画社会をめざす会, All Rights Reserved.